

2022年11月6日 礼拝説教要旨

詩編講解説教126「回復の物語」

詩編126：1～6、Iペトロ1：3～9

「主がシオンの捕われ人を連れ帰られると聞いて、わたしたちは夢を見ている人のようになった」（1節）多くの聖書学者がこの第126編の中で1節の「連れ帰られる」と訳している言葉（シューブ）に着目しています。新共同訳聖書は126編の背景にあるイスラエルのバビロニア捕囚からの帰還を意識して「連れ帰る」と訳したと思われませんが、この言葉は、例えば以前の口語訳聖書では「回復する」と訳されておりました。その方が原意に近いと思います。英語では restore、復元、正常な状態に戻すこと。またある学者は、これは運命を変えるような急激な転換を示す言葉だと言います。事態が大きく変わるということ。思いもよらぬ方向へ事態が動くことです。

イスラエルにとって、バビロニアからの解放、国への帰還はまさに思いもよらない出来事でありました。エルサレムの陥落、捕囚が始まってすでに半世紀ですから、人々の中には諦めがあったでしょう。ところが事態は大きく動きました。台頭してきたペルシャによってバビロニアが征服されたのです。それによってイスラエルは解放されて国に帰ることを許されました。エズラ記の冒頭にはペルシャの王キュロスがイスラエルに向けて国に帰るように布告したことが記されています。イスラエルの人々は帰還してエルサレムの神殿、街の城壁を再建していきます。その神殿の基礎が据えられた時、かつての神殿を見たことのある老人たちは大声をあげて泣き、喜びの叫び声をあげたとエズラ記には記されております。それこそ「夢を見ている人のようになった」（1節）なのでしょう。これは夢なのか現実なのか。それくらい思いもよらないことが起こった。そのような劇的な回復の物語がここにあります。

そのように過去の喜びを回顧する一方で、「主よ、わたしたちのために大きな業を成し遂げてください。わたしたちは喜び祝うでしょう。主よ、ネゲブに川の流れを導くかのように、わたしたちの捕われ人を連れ帰ってください」（3～4節）ここではそれがまだ起こっていない将来の出来事であるかのように記されます。これは祈りであり、願い、期待であります。一つの詩編に過去と将来、かつてと未だが同居する。これについて学者が様々な議論をしていますが、一つ興味深いのは、この詩人は現在の苦境の中で、過去の帰還の喜びを回顧しながら、将来の救いを期待しているという解釈があります。イスラエルを回復してくださった神さまの救いの出来事を思い起こし、そこに希望を置いて困難の中から救いを祈り求めるという理解です。

確かに、捕囚を解かれ帰還したとは言え、その後のイスラエルが常に平穏であったかというとは決してそうではありませんでした。ネヘミヤ記には、城壁の再建を妨害する周辺諸国の攻撃があったことが記されております。神殿を再建するまで実に25年かかっています。捕囚を解かれても、支配者がバビロニアからペルシャに代わっただけで、なお苦境は続いておりました。エステル記を読むと、強国の支配の中で民族殲滅の危機にみまわれたこともありました。そういう苦境の中で、彼らの支えになったのが、イスラエルがすでに経験してきた過去の救いの出来事でありました。捕囚からの解放、エルサレムへの帰還、神殿の再建。思いもよらない救いが起こった。この運命を変えるような劇的な回復の物語を彼らは持っていました。これこそが現在の苦しみを耐える力になったのです。

イスラエルはこういう回復、再生の物語を持っています。捕囚からの解放、帰還もそうですが、これも詩編の中によく出てくるのは出エジプトの物語です。エジプトの奴隷の生活から解放され、海を分けて神さまがイスラエルを助け出された。そして40年の荒野の旅路を守られ、約束の地カナンに導かれた。まさに運命を変えるような、絶望から希望へ転じる救いが行われた。このような回復の物語を持つことが人生において重要です。それだけでわたしたちはこの困難なこの世の旅路を耐え、これを乗り越えていけるのです。

では、わたしたちにとって絶望から希望へ転じる回復の物語とは何でしょう。それこそがイエス・キリストの救いに他なりません。今日は新約聖書のペトロの手紙を読みました。ここにはキリストが死者の中からよみがえられたことによって、わたしたちに神さまの国を生きる永遠の財産を受け継ぐ希望が与えられたことが記されています。「神は豊かな憐れみにより、わたしたちを新たに生れさせ、死者の中からのイエス・キリストの復活によって、生き生きとした希望を与え、また、あなたがたのために天に蓄えられている、朽ちず、汚れず、しぼまない財産を受け継ぐ者としてくださいました」(Iペトロ1:3~4)

わたしたちにはこのような素晴らしい救いが与えられているのですが、それに値する者であったかという点決してそうではありません。わたしたちは神さまに背いて罪を犯し、御国を受け継ぐどころか、永遠にそこから締め出される存在でありました。けれども神さまの憐れみにより、キリストの十字架とよみがえりの御業によって、わたしたちは全ての罪を赦されて神の子とされ、天の御国、永遠の命というかけがえのない財産を受け継ぐ者とされたのです。これは本来あり得ないことです。でもそれが可能になった。それはまさに運命を転じるような救いです。回復の物語をわたしたちも持っています。

「涙と共に種を蒔く人は、喜びの歌と共に刈り入れる。種の袋を背負い、泣きながら出て行った人は、束ねた穂を背負い、喜びの歌を歌いながら帰ってくる」(5~6節) 種を蒔くことと収穫は原因と結果で結びつくものですが、涙と喜びは直接結びつかない。けれども神さまの救いは運命を転じる回復の物語です。たとえ泣きながら種を蒔くような、そういう悲哀と徒労に満ちた人生でも、喜びを刈り取る、実りをもたらす人生へ神さまが回復して下さる。そういう回復の約束がここにあります。海を分け、捕囚を解かれた神さま、さらにイエス・キリストを死者の中からよみがえらせて、永遠の御国を与えてくださった神さまがわたしたちにこの回復を約束して下さる。なんという幸いでしょう。

かつての巡礼者たちもエルサレムで神さまを礼拝し、この回復の物語を聞いて、希望のうちに困難なこの世の旅路に戻って行きました。わたしたちも同じです。礼拝に集まり、ここでこの回復の物語を自分のこととして聞くのです。それぞれに涙の絶えない日々があります。けれども死者の中からのキリストのよみがえりこそ、わたしたちの回復の物語です。泣きながらこの世の旅路を歩む時も、やがて喜びの歌とともに刈り入れる、人生の実りを刈り取る。わたしたちはその日を約束されています。